

2013 年度

I 評価項目・担当部局

対象部局	環境創造学部環境創造学科 Faculty of Social- Human Environmentology
評価基準 4	教育内容・方法・成果
中項目 4-2	教育課程・教育内容
点検・評価項目(1)	4-2-1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。
評価の視点	必要な授業科目の開設状況
	順次性のある授業科目の体系的配置
	専門教育・教養教育の位置づけ
点検・評価項目(2)	4-2-2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。
評価の視点	学士課程教育に相応しい教育内容の提供
	初年次教育・高大連携に配慮した教育内容
	キャリア教育の実施状況
点検・評価項目(3)	4-2-3 国際化に対応した教育を行っているか。
	教育課程における国際化の推進
	学生の国際交流（交換留学、海外研修等）の推進
点検・評価項目(4)	4-2-4 教育課程の適切性について定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

II 【点検・評価項目ごとの現状説明】

4-2-1	<ul style="list-style-type: none"> 本学科は、社会科学を基礎に置き、環境問題や生活問題を分析し、実践的で創造的手法を身に付けることに主眼をおいている。初年次からカリキュラム・ポリシーに基づき授業科目を適切に開設している。 2013 年度から新カリキュラムが開始され、諸資格対応の科目、実践に重きを置く科目を増やした。そして都市環境・福祉環境・環境マネジメントの各コースの履修モデルを明らかにして、順次性のある科目の取り方を学生に指示している。 2013 年度から開始した新カリキュラムにおいては、内外研修の選択肢を増やし一層現場主義・コミュニケーション主義・実践主義が身に付くように配慮した。 近年 2 年次教育の重要性が認識されているが、本学科では 2 年次からゼミナールに入り、専門性をもった学修に移行できる利点がある。ゼミナールで学習意欲を増加させ、キャリア形成への展望を築けるように教員と学生、学生同士の信頼関係を深めている。 1～2 年次の基礎教育科目中の必修科目 24 単位、専門科目の必修科目 6 単位、自由科目 4 単位の計 34 単位を修得していないと、3 年次に進級できない。外国人留学生は、基礎教育科目中の必修科目 16 単位、留学生必修科目 6 単位、および留学生選択科目 2 単位と専門教育科目の必修科目 6 単位、自由科目 4 単位の計 34 単位を進級要件としている。
4-2-2	<ul style="list-style-type: none"> 2013 年度導入の新カリにおいて学士課程教育に相応しい教育内容を提供している。 全学的な理念・目的と本学部の理念・目的との連繋が図れるようカリキュラムや教育内容を微調整する。具体的には初年次教育の段階（「環境創造学入門講義」「環境創造入門ゼミ」等）で、全学的な理念・目的と学部の理念・目的との連結を意識した授業を展開している。「大学の学び」とは、単に知識の習得に終わらず、学生一人ひとりの問題発見と主体性にかかっておりチームワークによって論理的思考を高めていくプロセスや対話力を培っている。 インターンシップ教育や「キャリア形成と人生」をはじめとする科目を新カリにおいて開講。PBL（問題解決型）授業を展開し、振り返りも大事にしてインターンシップ教育の発表会を行い、学生が主体的に取り組んでいる。 留学生のための就職支援活動についても講師を依頼して有志教員で現状と対策を認識している。
4-2-3	<ul style="list-style-type: none"> 海外英語研修、内外研修を授業で設けており、かつ 2013 年度には交流校派遣留学生 1 名と奨学金留学生 1 名の合計 2 名の留学生を出すこととなった。「内外研修 A」では「ドイツ・環境保護のまちづくり事情研修」を夏休み中に実施している。
4-2-4	カリキュラム・ポリシーに基づき基礎科目、専門科目、全学共通科目、言語科目がバランスよく配置されていることに関しては、教務委員会が検証し、議事録を公開するとともに、教授会で詳細を報告している。教務委員会が責任主体となり、月 1 回の教務委員会を開催し審議した結果を、学部教授会で報告承認事項として報告し、最終的には教授会で決定している。

【効果が上がっている事項】

4-2-1	<ul style="list-style-type: none"> 2013 年度から新カリキュラムを実施し、全学共通科目の必修単位数を 4 単位から 12 単位とした。
4-2-2	<ul style="list-style-type: none"> 2013 年度、2014 年度のオリエンテーションの運営には、教務委員会とオリエンテーション委員会の教員が、総力をあげ、在学生も運営に関わって新生へへのきめ細かい指導を実施している。「新生オリエンテーション」（付録：推薦図書一覧）冊子を作成、全員に配布し、学部長挨拶、全教員紹介、生活面に関する講話、キャンパス・ツアー、懇親会を実施している。
4-2-3	<ul style="list-style-type: none"> 留学を促す試みによって、2010 年頃までは海外への留学を希望する学生が少なかったが、ここ 2 年位は志願者があり、毎年奨学金留学生を出している状態である。さらにこれまで応募のなかった協定校留学応募者、同合格者も出ている。

4-2-4	・毎年、非常勤講師が退職あるいは交替の際に、教務委員会でこれらの教員が担当していた授業について検証し、新年度に開講するかしないかも含めて検討している。またこうしたプロセスについては教務委員会議事録で公開すると同時に、教授会の教務委員会報告でも明示している。教員個々の研究業績が上がっているか情報を共有する必要がある。研究業績の公表は全員が行っているが、教育活動の公表も全教員が行う必要がある。
-------	--

【改善すべき事項】

4-2-1	学生の基礎力を付けることに力点を置き、学習の到達度を明確に示し、カリキュラム・ポリシーに則った学科の特色を反映することにより、学習成果を保証する必要がある。
4-2-2	・留学応募者と資格試験応募者の増加を推進するために、新入生オリエンテーションと入門ゼミを通して資格試験の受験を促す。今年度より英語科目担当者とゼミ担当者を介して英語検定、TOEIC等の受験者数と合格者数を把握し、経年データをとる。英語検定の合格者の努力を讃える機会をもち、留学経験を語る機会も設け、動機づけを高めていきたい。日本語検定1級を取得した留学生の努力も讃える機会をもちたいと考えている。
4-2-3	グローバル化社会を意識し、語学力を測る試験の受験を奨励する。教員は学生に対し、自らの学力や専門領域を捉え直す働きかけをおこない、学習や将来への疑問や不安を解消し、学習意欲を持続させることに力点を置く必要がある。
4-2-4	教育課程の適切性について定期的に検証を行っていく機会を増やす。例えば「教育研究ワークショップ」において、学部の理念・目的とカリキュラムおよび教育内容との整合性を常時点検する。また全学的な理念・目的と本学部の理念・目的との連繋が図れるようカリキュラムや教育内容を微調整する。

Ⅲ 本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

<p>教務委員会議事録および教授会議事録</p> <p>奨学金留学応募者数（うち合格者数）（2010年度0（教員からの推薦を受け1）、2011年度6（合格者1）、2012年度3人（合格者1）、2013年度3名（合格者1）</p> <p>協定校留学応募者数（うち合格者数）（2010年度0、2011年度0、2012年度1（0）、2013年度1（1））</p>
--

【2014年度からの達成目標】

【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標	目標達成の指標となるもの	評価				
		2014	2015	2016	2017	2018
<p>中期目標 (2014～2018)</p> <p>基礎科目、専門科目、全学共通科目、言語科目のバランスよい配置</p> <p>・カリキュラム・ポリシーに基づき、体系的で一貫性のある教育プログラムの実践として①基盤教育を強化、②主体的学習を促す実践的な専門教育の充実を目指す。</p> <p>・教育の質的保証の重要性について認識を高める。</p> <p>・ゼミ担当教員だけでなく、学部内設置の学生生活・就職支援委員会が、生活面と就職支援についてきめ細やかな支援を推進する。</p>	<p>学生が何をどのように学修したかを記録し、ゼミなどでの発表をビデオやテープに収めて学修の振り返りを行う。</p>	→				
		→				
<p>14年度目標</p> <p>・基礎科目、専門科目、全学共通科目、言語科目のバランスよい配置について検討を重ね、FDの時間を増やし、教員が自分の授業や指導において努力した過程を目に見える形で記録に残すことを検討する。</p>	<p>授業内容や方法の改善、教育活動の正当な評価、優れた指導の共有などに主眼をおく。</p>	→				